

変化するケーブルTVサービス

ケーブルTV事業者を代表するNCTAは、その名称を2001年にNational Cable Television AssociationからNational Cable & Telecommunications Associationに変えた。これは、ケーブルTV事業者の提供するサービスがブロードバンド、それに電話へと広がったことを反映している。しかし、名称から「テレビ」が消えても、ケーブルTV事業者のビジネスの主役は「テレビ」であることは変わってはいなかった。だが、名称から「テレビ」が消えて10年経った今、ケーブルTV事業者の主役は「テレビ」から、パーソナル・ディスプレイに変わり始めている。

増えるパーソナル・ディスプレイへの配信サービス

ケーブルTV事業者はオーバー・ザ・トップ(OTT)で配信されるビデオサービスに対抗し、TV Everywhereを始めた。TV Everywhereは、Hulu等の通常のOTTサービスでは配信されていない多チャンネル・ネットワークの番組をケーブルTVの加入者に限定して提供する。TV Everywhereの番組は通常、放送の翌日から配信される。これに加え、3月にはTime Warner CableとCablevisionが放送と同時にケーブルTVで提供されている番組を、iPadからでも視聴可能にするサービスを開始した。配信はIPベースでケーブルモデムを使って行われ、家庭内での伝送にはWiFiが使われる。このサービスの利用は加入者の宅内に限定される。

現在はiPad向けだけであるが、アプリケーションを開発すれば、他のタブレット、スマートフォン、コネクテッド(スマート)TV、ゲームコンソールなど、インターネットに接続できるデバイスであればサービスを受けることは可能である。これまでのようにTVとSTBの組み合わせに限定されること

なく、ケーブルTVと同様のサービスを多様なデバイス向けに提供することが可能になる。すでに、AT&TのU-Verse TVでは、Xbox 360をSTBの代わりに使うことが可能である。また、今年1月のCESでは、ComcastとTime WarnerがコネクテッドTVを使い、STBなしでケーブルTVサービス受けることを可能にするアプリケーションのデモをしていた。

次世代アーキテクチャー“Xculibur”の登場

Comcastは、Xculiburと呼ばれる次世代アーキテクチャーのテストをオーガスタ(ジョージア州)で数十世帯を対象に開始した。Xculiburは、パーソナライズが容易でインテリジェントなインタフェースを持つ。大きな特徴は

それらの処理をSTBではなく、クラウド上で行っていることである。テストでは、放送の伝送にQAMを使っていることもあり、IntelのCE3100を搭載したQAMとIPのハイブリッドSTBを使っているが、伝送をIPに統一すれば、STBを使わずにコネクテッドTV、iPad等でケーブルTVを見ることが可能になる。

このアーキテクチャーの利点は、STBが不要になり、多様なデバイスを対象にサービスが提供できるだけではない。クラウドベースでサービスを提供することで、新しいサービスの導入が容易になり、また、全地域で統一したサービスを提供することが可能になる。全米各地でサービスを提供しているComcast等の事業者にとって、これはサポートコストの削減になる。

この変化は急速には訪れないであろう。クラウドへの移行は、技術的にケーブル・アーキテクチャーの大きな変化であり、短期には終わらない。また、これまでSTBをインテリジェント化することがサービスの差別化、顧客囲い込みの鍵と考えてきたケーブルTV事業者が、その考えを完全に捨てるのにも時間がかかるであろう。

The Compass ニュース

NSIリサーチは、アメリカのデジタル放送とインターネットTVの動向を伝えるマンスリーレポートのThe Compassを出版しています。The Compassのサンプル購読がご希望であれば、compass@nsirinc.comに会社名、氏名を含めたEメールをお送り下さい。

